

【お問い合わせ】

創世記 1:26 についてです。

新改訳聖書の古い版では「われわれに似るように、われわれのかたちに人を造ろう。」とありますが、新しい版では、「さあ人を造ろう。われわれのかたちとして、われわれに似せて。」となっています。

古い版からは、似ることが強調され、神様の内面性が似せて造られた印象を受けます。

新しい版では、かたちが強調され、神様の姿、かたちが似せて造られた印象を受けます。

銘形先生のHPを拝見すると、

かたちとは、三位一体なる神はゆるぎない永遠の交わりのかたちであるとあり、そのとおりだと思わされます。

新改訳聖書の訳者が、どのような意図で、この節の表現を変更されたのかが明らかではありませんが、どちらの訳の方が、より原文に忠実な表現と言えますでしょうか。

●お問い合わせに対する直接的な回答をする前に、まず、創世記 1 章 26 節のヘブル語の原文がどうなっているかを見てください。私もこの際、勉強するつもりで取り上げてみます。

Gen 1:26
←

キドゥムーテーヌー	ベツアルメーヌー	アーダーム	ナアセー	エローヒーム	ヴァヨームル
כִּדְמוּתֵנוּ	בְּצַלְמֵנוּ	אָדָם	נַעֲשֶׂה	אֱלֹהִים	וַיֹּאמֶר
われわれの似姿のとおり	われわれのかたちに	人(を)	われわれは造ろう	神(は)	そして、仰せられた

【読み】 ヴァヨームル エローヒーム ナアセー アーダーム ベツアルメーヌー キドゥムーテーヌー

【定型句】 וַיֹּאמֶר אֱלֹהִים 「ヴァヨームル エローヒーム」

創世記1章にはこの定型句が9回登場します。そして、その後に来る神のことばの最初の言葉を列記してみます。

(1) 3節「あれ」=「イエヒー」יְהִי (光が)—指示形・パエル態(基本)/「ハーヤー」הָיָה

(2) 6節「あれ」=「イエヒー」יְהִי (大空が)—指示形・パエル態(基本形)/「ハーヤー」הָיָה

(3) 9節「集まれ」=「イッカーヴー」יִקְוּ (水が)—指示形・ニファル態(受動態)/「カーヴァー」קָוָה

(4) 11節「芽生えよ」=「タドーシェー」תִּדְשֵׂא (地は)—指示形・ヒフィール態(使役態)/「ダーシャー」דָּשָׂא

- (5) 14節「あれ」=「イエヒー」יְהִי (光る物が)―指示形・パエル態(基本)/「ハーヤー」הָיָה
 (6) 20節「群がれ」=「イシュレツ」יִשְׁרְצוּ (水は)―指示形・パエル態(基本)/「シャーラツ」שָׂרַץ
 (7) 24節「生じさせよ」=「トーツエー」תֹּצֵא (地は)―指示形・ヒフィール態(使役態)/「ヤーツァー」יָצָא
 (8) 26節「造ろう」=「ナアセー」נַעֲשֶׂה (私たちは)―未完了・パエル態(基本)/「アーサー」עָשָׂה
 (9) 29節「見よ」=「ヒンネー」הִנֵּה―感嘆詞

【分解】

ベツアルメーヌー

בְּצִלְמֵנוּ

人称接尾辞「私たちの」

נוּ

男性名詞「かたち」

צֶלֶם

「ツエレム」צֶלֶם

前置詞「に」

בְּ

キデムーテーヌー

בְּדִמוּתֵנוּ

人称接尾辞「私たちの」

נוּ

女性名詞「似姿」

דְּמוּת

「デムート」דְּמוּת

前置詞「のとおりに」

בְּ

【回答】

●上記に記した原文からどのように訳するのが最適か、それぞれ考えると良いと思います。どちらの訳にも味があります。第二版では原文の意味を日本語の表現としてふさわしいように訳しているように思えますし、第三版では原文の順序に従って訳しています。しかも、「さあ」という言葉を加えて、未完了の「造る」という神の意志と願望を強く表わすような訳文となっています。一応、原文を直訳すれば、「わたしたちは造ろう。わたしたちのかたちに、わたしたちの似姿のとおり。」です。前置詞を意識した訳文ですが、意味は十分に通じると思うのですが・・・。

●肝心なことは、神の言われる「私たちのかたち」、あるいは「私たちの似姿」がいかなるものかということ です。私見としては、神の「かたち」、神の「似姿」こそ、三位一体なる神の永遠の愛の交わりとしてのかたち(存在のあり方)だと考えます。創世記にはまだ三位一体の概念は啓示されていないとする学者もいますが、聖書は聖霊の息吹によって記されているので、聖書全体から「エローヒーム」の概念を導き出す必要があります。啓示の漸次性を考慮しながら、永遠の神はいつでもどこでも不変であることを考えるなら、啓示の原初的神秘性がすでに創世記の中に隠されていると考えます。すなわち、神の福音の秘密は、すでに創世記1章の中に隠されていると信じます。

●私のHP「牧師の書斎」に「プロスの神秘」について書いたものがあります。HPの箇所は、ヨハネの福音書における「七つのしるし」に見るイエスの栄光の瞑想の中のNo.1です。「水を芳醇なぶどう酒に変えた奇蹟」の中にあります。創世記の1章26節の神の「かたち」、神の「似姿」の理解のヒントは、ギリシャ語では「プロス」と

いう前置詞にその秘密が隠されているように思います。

●ヨハネの福音書1章1節

- 1 初めに、ことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。
- 2 この方は、初めに神とともにおられた。
- 3 すべてのものは、この方によって造られた。

とあります。ここで注目したいことは、「ことばは神とともにあった」と言う部分です。多くの聖書(翻訳)がヨハネの1章1節を「ことばが神とともにあった」と訳しているにもかかわらず、西南大学の教授である宮原望氏の「ヨハネの福音書—私訳と注解」では、この部分を「神に向かっていた」と訳しています。私はこの方の私訳付の注解書を読んで、目からうろこが落ちたような気がしました。

●「共にある」というイメージと、「～向かっている」というイメージをどのように理解したらよいのでしょうか。ギリシャ語には「共に」という意味の言葉に「スン」σύνがあります。しかしここで使われているギリシャ語は前置詞の「プロス」(προς)です。「共に」という意味もありますが、本来的には「～に向かう」という意味です。しかも、「～に向かっていた」の「いた」の時制は未完形です。はじめから、今も、ずっと「ことばは神に向かっていた」し、今も「向かっている」のです。ことばが人となってこの世にいたときにも「ずっと向かっていた」のです。ことばだけが神(父)に向かっていただけでなく、父もことば(子)に向かい合っているのです。こうしたかわりを持ったイメージが「共に」なのです。

●つまり、ギリシャ語の「プロス」προςという前置詞は、基本的に「～の方に向く」という意味として使われることが圧倒的に多いのですが、「向き合う」ことで、「共に」という意味にもなるのです。この「向き合い」こそが、ヨハネ福音書では「いのち、永遠のいのち」なのだとは私は理解します。そしてそのいのちに「とどまる」ことが、ヨハネ福音書のキーワードとなっています。

●ギリシャ語文法の権威者である織田昭師も「聖書講解」の中で、以下のように述べています。

ここの「と共に」は、普通の with に当たる前置詞とは違い、神と「向き合っ」て」という感じの前置詞(προς)が使っています。これは、神と密なる交わりを持って、意志を伝え合い交流し合っ」というような内容の「向き合っ」て」を表す言葉です。「言」は単に神の意志や思いの別名ではなくて、本当に神と向き合っ、親しく交わりを持つような存在—命のつながりの原型と言えるような性質を持っているのです。

2013.4.17

銘形 秀則